

幼児のオノマトペによる身体表現における
「何かになる表現」

—自分なりの表現と定型的な表現に着目して—

村瀬瑠美（千葉敬愛短期大学）

1. はじめに

幼児の身体表現活動において、保育者が幼児に対して用いる言葉で、イメージと動きを導くためによく用いられているものの一つにオノマトペがある。筆者は以前の研究で、同じ幼稚園に通う5歳児を対象に、幼児のオノマトペに対する身体表現を調査した。その中で、あるオノマトペに対して創造性の高いオリジナルな動きする幼児と、「定型的な身体表現」（本山・西，2000）をする幼児が見出された。幼児期の身体表現活動は、幼児を同じ動きに導き、上達させることを目指すものではない。保育者は幼児の身体表現が定型化せず、一人一人のイメージが多様な動きとして身体にあらわれるように、身体表現を導かなければならない。しかし、幼児を「定型的な身体表現」ではなく「自分なりの表現」に導くような言葉かけを検討するためには、まずオノマトペに対して「定型的な身体表現」をする幼児と「自分なりの身体表現」をする幼児を比較検討し、両者の違いを生み出す要因を検討しなければならない。そこで、本研究では、5歳児を対象にオノマトペからあらわれる「何かになる表現」に着目し、オノマトペに対する「自分なりの身体表現」と「定型的な身体表現」の違いを生み出す要因を考察することを目的とした。

2. 方法

本研究では5歳児13名に対して実験を行った。

1) 対象者

対象者はA幼稚園の5歳児クラスに所属し、夏季預かり保育を利用する園児13名（男児4名、女児9名）であった。

2) 日時と場所

実験は2021年7月下旬に1回、8月上旬に2回の計3回行った。1回の実験は1時間半程度であった。A幼稚園の空き教室を実験室とした。

3) 実験の概要

実験は1人の対象者に対して10分前後、一対一の面接形式で行われ、オノマトペに対する反応を映像記録した。実験試技は対象者1人に対して6回、「くるくる」「ぴょんぴょん」「ブーン」「ざあざあ」「ぴかぴか」「プンポン」の6つを試技の題材とした。実験は「○○（オノマトペ）で動いてみよう」のようにクイズゲームとして設定した。まず、実験者がそれぞれのオノマトペを発して、対象者に何をイメージしたかを聞いた。その後、

オノマトペに対する対象者の動きを促した。

4) 分析方法

対象者13名の映像記録から、村瀬・寺山（2020）の定義に基づき「何かになる」動きを抽出した。その後、抽出された動きを筆者と他の2名の研究者と検討し、一つ一つの動きに対して「自分なりの身体表現」「定型的な身体表現」「どちらともいえない表現」の判定をした。判定の結果をもとに、「自分なりの身体表現」と「定型的な身体表現」の違いを生み出す要因を比較考察した。

3. 結果と考察

1) 全体の傾向

13人の対象者に対する実験の結果、全77試技中、イメージと動きがどちらも得られたのは56試技であった。1試技に複数の動きが見られた試技もあったため、得られた動きは66個であった。村瀬らの提唱した3つのタイプ（「になる型」「である型」「する型」）に分けて66個の動きを整理したところ、「何かになる表現」は53個見出された。以上の結果から、幼児がオノマトペに対してあらかず身体表現は、「何かになる表現」が最も出現する可能性が高いことが明らかとなった。

抽出された53個の「何かになる表現」のうち、「自分なりの身体表現」と判断されたのは22個、「定型的な身体表現」は18個、「どちらともいえない表現」は13個であった。

2) 「自分なりの身体表現」に関する考察

オノマトペから「自分なりの身体表現」をあらわす場合には、「何かになる表現」に着目すると以下のパターンがあると考えられた。

- ①オノマトペから想起するイメージが自分なりのイメージである。
- ②オノマトペから想起するイメージは他の対象者も想起するものであるが、イメージしたものの表象化が自分なりである。
- ③オノマトペから想起するイメージ、表象化は他の対象者と同様であるが、動き方が大きい・細かいなど、動きの誇張が見られる。

以上から、オノマトペに対する「自分なりの身体表現」と「定型的な身体表現」の違いを生み出す要因として「イメージ想起」「表象化」「動きの誇張」の3点が推察された。

引用・参考

本山益子・西洋子（2000）幼児期の身体表現の特性Ⅱ—身体表現と認識との関連—。舞踊學，23：53-64。

村瀬瑠美・寺山由美（2020）身体表現活動におけるオノマトペが幼児に想起させるイメージと動き：オノマトペの性質・意味内容に着目した実験から。体育学研究，65：35-52。